

近代思潮における一思考形式について

—序 説—

野 口 広 明

(1998年12月2日受理)

はじめに

音韻論の大家、トゥルベッコイ⁽¹⁾は、友人である言語学者ヤコブソン⁽²⁾への手紙のなかで、次のように語っている。

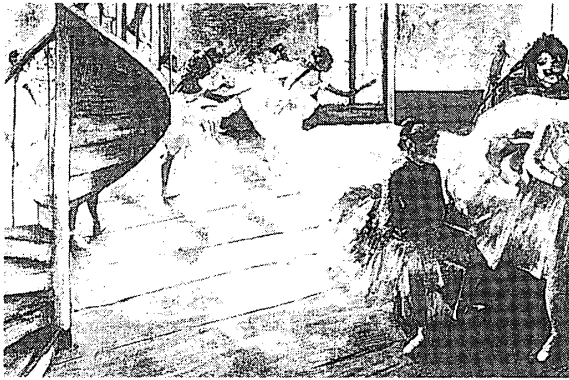
いずれにせよ、文化の様々な側面の発展にはある種の平行関係があることは疑いない。したがって、この平行関係を条件づけているある法則性があるはずだ。(…)生活の様々な側面の発展における平行関係の総合的な研究を目的とする特別な学問がおこななければならない。⁽³⁾

本論ではトゥルベッコイのいう意味での平行関係を、20世紀初頭の前衛的な文学や芸術、さらには哲学や言語研究において検証し、その平行関係を条件づけているものについて考察したい。

美 術

1908—1918の時期は美術史においていわゆる史的アヴァンギャルドの時期と呼ばれている。1909/10—12年、ピカソ⁽⁴⁾とブラック⁽⁵⁾の分析的キュビズム⁽⁶⁾によって新たな造形言語が作りだされる。そこで問題となるのは、外界の現実の分析であるよりは、芸術それ自体の分析であり、芸術の構造とその内的な過程の分析である⁽⁷⁾。このような技法と問題意識は、しかし19世紀の写実的な絵画においてすでに芽生えていた。ドガ⁽⁸⁾の踊り子を描いた作品の一つに、画面によって切り取られた体半分だけの踊り子が、前面に描かれた作品がある。全身が描かれた、踊っている踊り子は画面の背景に納まっている。この絵では、踊り子とその踊りという題材と同時に、それをとらえる視点が意識されているのである。前面に描かれた踊り子の一部分が意味し、指し示すもの

は、その部分性を作りだす視点であり、題材の方がむしろ背景にある。しかしドガにおいては、部分化されることがあるにせよ、対象世界は確かに存在している。ピカソの「青の時代」を代表する『ギターひきの老人』に目を向けてみよう。老人の頭と肩だけが不自然にうなだれ、人体ではあり得ない姿勢になっている。これは2枚の絵を組み合わせた構図である。二つの視点が一つの絵を作っている。しかし、視点の問題性はここでは他の表現要素と一体となっており、不自然なポーズは、悲哀や孤独さを表現してもいる。しかしやがてキュビズムと呼ばれる時期になると、視点の複数性は対象を解体するにいたる。以上で、19世紀なかばから20世紀の初めにかけて、視点という、対象にたいするもう一つの極への意識が徐々に高まっていった過程を絵画の歴史において概観したが、次に言語学に目をむけてみよう。



ドガ「舞台稽古」1877年 油彩 キャンパス
0.68×1.03 グラスゴー・アート・ギャラリー
パーレル・コレクション



パブロ・ピカソ「老いたるギター弾き」
1903年 油彩 キャンヴァス
121.3×82.6cm シカゴ美術研究所
(ヘレン・バートバートレット記念コレ
クション)

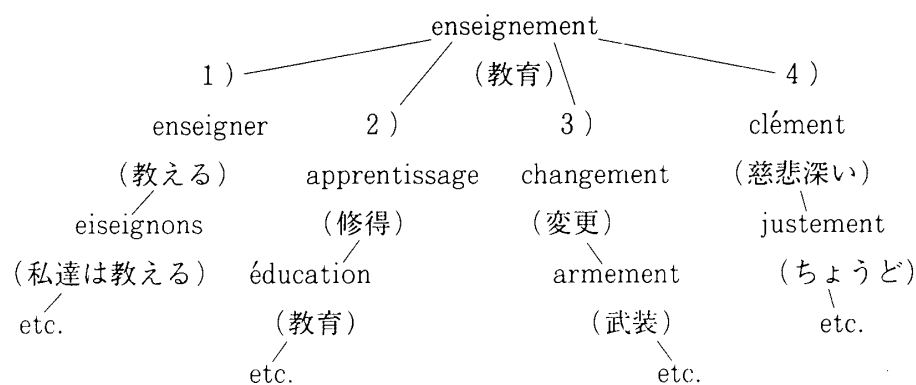
言語学

ヤコブ・グリム⁽⁹⁾は、「ギリシア語とラテン語の一定音に、必ずゲルマン語のまったく一定した別の音に対応している」⁽¹⁰⁾ことを発見した。「この現象は子音推移、詳しくは第一次子音推移といわれる。」一例を示すと次の様なものである。

gr. *καρδια* , lat. *cor* = Herz 心
gr. *πατηρ* , lat. *pater* = Vater 父
gr. *τρεις* , lat. *tres* = engl. three 3

これは「インドゲルマン語 [……] の無声閉鎖音は、ゲルマン語では摩擦音となる」という法則の例である。ここで記述されているのは、紀元前1500年頃から紀元前 500年にかけてインドゲルマン語の一部に起こった、インドゲルマン語の他の分枝にはかかわりのない言語的变化といわれる。このような変化は、個々の発話主体を超越した次元で、およそ10世紀という時の流れのなかで見いだされる変化である。それに対し、ソシュール⁽¹¹⁾は、「語る主体の意識」というものを言語学に導入した。「語る主体の意識」のなかで見いだされる共存辞項どうしの関係が共時的関係である。

共時的系においては、可能な変種は一つしかなく、また可能な方法の一つしかないのである。文法学者、言語学者のこのような展望は原基、原型として発言主体らの展望をとっているものであり、また、発言主体らの印象がどのようなものであるのかを問ういがいの方法はない。どのような範囲内で、一つの物象があるのかを見極めるためには、どのような範囲内でそれが発言主体らの意識のなかにあるのか、それが意味しているのかを追求する必要があるだろう。それゆえ、展望、方法はただ一つ、発言主体らによって感知されるものを観察することなのである。⁽¹²⁾



これは共時的系のなかの「連合関係」の例として挙げられたものである。⁽¹³⁾ 1) は意味と形態の類似。2) は意味の類似。3) は動詞派生の名詞を作る接尾辞の形態と機能の類似。4) は形態の類似による連想関係である。連想関係では順序は不定であり、辞項の数も特定できない。このような観点は後にイエラムスレウ⁽¹⁴⁾によって言語学的に整理されパラディグマ的關係と呼ばれた。⁽¹⁵⁾ 「緑の/ 青い/ 赤い柵」において、「緑の」「青い」「赤い」はパラディグマ的關係にある。パラディグマ的關係がシンタグマ的關係つまり文におけるような言語の線状の関係を前提しているのにたいし、ソシュールの「連合関係」は「連想関係」とも訳されるもので、イエラムスレウはそれを心

理学主義⁽¹⁶⁾であるとして退けている。しかしそれは、ソシュールにとって言語の構造が、主観性の構造として見いだされていたということである。連合関係と統合関係をソシュールが、「われわれの精神活動の二つの形式」⁽¹⁷⁾と呼んでいることからそれは窺える。共時性⁽¹⁸⁾という場が、主観性の領域で見いだされるものであり、単なる同時性ではないことは、「発言主体の意識を原基、原型とする」という言葉から明らかである。ソシュールは主観性の構造を問う立場に立っている。そしてこの態度は、ソシュールの言語観のみならず、言語学観にも共通するものである。

ことばの事象に関してまともに意味の通ずるようなくあいに何か書こうとするのは、ただの十行だけにしても困難なことで、その困難さにも嫌気がさします。ずいぶん前からこういった事象の論理的分類、我々がそれを取り扱ういろいろな視点の分類に関心をもっていますが、だんだんとその仕事の巨大さがわかるようになってきました。その仕事とは、一つ一つの操作を前もって見ておいたカテゴリーに帰着させることにより、言語学者にいったい彼の営為がどんなものかを示すことです。⁽¹⁹⁾

主観性の領域への遡行が、ソシュールの思考を特徴づけている。つまり発言主体を超越した客観的な言語事象から主観性の領域で見いだされる言語事象へ、また言語の研究から言語研究の方法論的反省への関心の移行が確認できる。そしてそこには、外界の現実の分析よりは芸術それ自体の分析が、つまり芸術の構造とその内的な過程の分析が問題となったという前衛芸術の方法との共通性が見て取れるのである。

小説の理論

小説の理論において「語り手」という概念が登場したのは19世紀の半ば過ぎ、オットー・ルードヴィヒ⁽²⁰⁾においてである。ルードヴィヒは詩的リアリズムの概念とその様式を確立した作家・理論家である。『天と地の間』のような心理描写にすぐれたリアリスティックな小説を書いている。そして「異なった語りの種類（本来の語り／場面の語り）を区別し、作家と語り手を切り離そうとした最初の人であった」⁽²¹⁾作家は現実に存在する実在の人物である。それに対し、作品を構成する機能としての語り手は、作品の構成要素であり作品とともに在りつづける働きである。そしてケーテ・フリーデマン⁽²²⁾の『叙事詩における語り手の役割』において、語り手という概念は一層彫琢され、「芸術作品の形式の一つとして、文芸学がそこに属する芸術学の研究対象とな

る」⁽²³⁾。語り手という概念が提示され、研究される過程は、作品という概念の辿った道と表裏一体の関係にある。作品存在の自立性が意識され、その在り方が研究されることで、語り手の概念がそのような意味での作品を構成する機能として見いだされるのである。このような意味での語り手は、読書主体の意識のなかで作品が構成されるとき、つまり作品が読まれるとき機能する形式である。作家と、ここで問題としている語り手との違いは、前者が読者の意識を超越した対象であるのに対し、後者が作品を読む読者の意識に内在し、読書の意識のなかではじめて見いだされるという点にある。その意味で、語り手は主観性の領域で見いだされる対象である。主観性の領域への逆行は、小説の理論においても新たな対象野を生みだしたのである。

哲 学

私たちの意識を超越した、意識の外にある対象への没入を、フッサール⁽²⁴⁾は「自然的態度」と呼んでいる。通常の私たちの生と、通常の学問とはすべてこの「自然的態度」によって遂行されている。この態度において、私たちはあらかじめ与えられた世界というものを持ち、それがすべての基盤となる。フッサールが提唱した現象学⁽²⁵⁾は、この自然的態度を「作用の外におく」ことによって「態度変更」を遂行し「超越論的態度」にいたる、というものであった⁽²⁶⁾。超越論的態度においては、あらかじめ与えられたものはない。すべてが意識による構成の産物としてとらえなおされる。それは主観性の領域への根底的な逆行であった。

超越論的現象学は構成的意識の現象学である。したがって（意識ならざる諸対象に関する）客観的公理は何一つこの学には含まれていない（……）認識論的関心、超越論的関心は客観的学問には関知しない。客観的なものはまさに客観的学問に所属しているのである。⁽²⁷⁾

そしてハイデガー⁽²⁸⁾は、1927年に次のように書いている。

しかし、ギリシア哲学はその決定的な始まりから、存在するものを問いの対象にしていたのではなかったか。（……）けれども、すでにその端緒においてさえ、ある奇妙なことが認められた。哲学は、存在するものについての思惟を自省するという仕方での存在の闡明を果たそうとしているのである（パルメニデス）⁽²⁹⁾。プラトン⁽³⁰⁾のアイデアの露呈も、魂の自己自身との対話（ロゴス）に定位されている。

アリストテレスのカテゴリー⁽³¹⁾は、理性の言表的認識作用との関係で生じたものである。デカルト⁽³²⁾は明らかに、第一哲学を思惟するものに基づかしめている。カントの超越論的問題群⁽³³⁾は意識の領野を動いている。このように存在するものから意識へ視線を転ずるということは、はたして偶然に起こっているのであろうか。⁽³⁴⁾

私たちが概観してきたのは、ハイデガーの言う「存在するものから意識へ視線を転ずるということ」のヴァリエーションであったとみることができないだろうか。ハイデガーはギリシア以来の哲学について語っており、19世紀後半から20世紀の初めにかけてという本論での時期の設定とは一致しない。しかしこの時期に、ハイデガーが述べているような視線の転換が幾つかの領域で並行して生じたことは疑いない事実である。

文学表現

フリードリヒ・バイスナー⁽³⁵⁾は、「物語作者フランツ・カフカ」という講演のなかで、カフカ⁽³⁶⁾の長編小説『失踪者』(1912-14)について次の様に語っている。

これまで指摘されたことがないように思うが、カフカは一人称体においてだけでなく三人称体においてもつねに、アインズィニヒに物語っている。小説『失踪者』のなかで物語られることはすべて、カール・ロスマンが見、感じたことである。彼なしに、あるいは彼に逆らって生ずることは何もなく、彼が登場せずになんかが物語られることはないのであって、語り手はカールの考えしか、もっぱらカールの考えだけしか伝えることができない。そしてこのことは、『審判』や『城』においても同様である。⁽³⁷⁾

アインズィニヒという語は、バイスナーの造語である。「アイン」は「一つ」、「ズィン」は「感覚」を意味するので、アインズィニヒは「一つの感覚で」といった意味になる。バイスナーが例にとっている『失踪者』でいえば、主人公カール・ロスマンの「感覚」で作品世界が構成されているという意味である。カフカの長編小説には、ちょうどドガの絵画のように、物語世界とそれを構成する視点とがともに書き込まれている。そして視点そのものが表現対象となる仕方も、ドガの場合と同じように、表現された世界の部分性、断片性を際立たせることによる場合が多い。このように構成する

意識への回帰という方向性を含むことで、カフカの長編小説は一つの問題圏に属している。それは「このように存在するものから意識へ視線を転ずるということは、はたして偶然に起こっているのであろうか」というハイデガーの問いによって指し示されている問題圏である。「存在するものから意識へ視線を転ずるということ」は、フッサールに従えば「自然的態度」から「超越論的態度」への移行を意味する。この態度は同時代の様々な分野での活動に共通する一つの思考形式となっている。超越論的態度の様々なヴァリエーションとその展開を踏査し、その人間存在にとっての意味を探究することがこの序論に続く諸研究での課題となる。

注

- (1) Nikolai Sergejewitsch Trubezkoi (1890—1938) モスクワに生まれる。言語学者、民俗学者。1908年、モスクワ大学入学。始め哲学・心理学を学ぶが、3学期に言語学科に転科する。それは、『人間学』の中で言語学だけが真に科学的方法を有する唯一の分野であり、人間学その他のすべての分野は、言語学を模範としてその方法論を整えてはじめて、その『錬金術的』発展段階からより高次の段階へと進歩し得る（『音韻論の原理』付録328頁）」と考えたからである。1913年、ライプツィヒに留学して主に古代インド語とアヴェスタ語を学ぶ。1915—16年に教授資格試験を受け、モスクワ大学から講義許可を取得して同大学で私講師となる。しかし1919年に亡命してソビエトを離れた。1923年、ウィーン大学教授となる。プラハ言語学サークルの創設者の一人。
- (2) Roman Jakobson (1896—1982) モスクワ大学ラザレフ東洋語学院卒業。1915年モスクワ言語学集団を創設。1920年チェコスロヴァキアに移る。1926年プラハ言語学サークルの創設に参加し、トルベッコイを助けて活躍する。ナチのチェコスロヴァキア侵入のため、スカンディナヴィアに逃れ、コペンハーゲン、オスロー、ウプサラで教鞭をとる。1941年、アメリカ合衆国へ移り、ニューヨークでレヴィ＝ストロースと相知る。この出会いが後者による構造人類学を準備することとなった。
- (3) N.S. トゥルベッコイ『音韻論の原理』長嶋善郎 訳 岩波書店 1980年。338頁。(N.S. Trubetzkoy, Grundzüge der Phonologie. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1958)
- (4) Pablo Picasso (1881—1973) スペインの画家、グラフィックデザイナー、彫刻家。マドリードの芸術学院に学び、1904年からパリで暮らす。1901—04年は「青の時代」と呼ばれ、濃い暗い青を主調として貧しい人々や老人などが、陰鬱な抒情的筆遣いで描かれた。1905—07年は「ばら色の時代」と呼ばれる。サーカスや旅芸人が明るいばら色で描かれるとともに、造形的な関心の高まりがみられる。また1907年の『アヴィニヨンの娘』では、複数の視点が結合され、対象の解体とその再構成という後のキュビズムの基本原則がすでにみられる。
- (5) Georges Braque (1882—1963) フランスの画家。1900年にパリに来る。1905年パリでフォーヴィスムの画家たちと、1907年にピカソと出会う。
- (6) 描き出される諸対象を立方体の形式要素に還元しようとする近代絵画の傾向。セザンヌが、自然を幾何学的な形に還元しようとしたのが始まり。ブラック、また続いてピカソが、1907年にキュビズム(立体派)の技法を発展させた。ピカソが1907年に描いた『アヴィニヨンの娘達』は典型的である。キュビズムは、分析的キュビズムとして始まった。そこでは、宝石のようにカットされた、様々な視点から描かれた像が、同時化され平面化される。1912年、グリスが断片化した面の総合に取り組み、コラージュの技法に

よって総合的キュビズムを基礎付けた。

- (7) *PROPYLÄEN KUNSTGESCHICHTE Die Kunst des 20. Jahrhunderts 1880-1940* PROPYLEN Verlag Berlin S.15.
- (8) Edgar Degas (1834-1917). パリ生まれの画家。馬場、踊り子などを好んで描いた。瞬間的なしぐさの表現に長ける。断片的な像もまたドガの絵画の特徴である。人物や事物が端に配置され切り取られたように見える構図が特徴的。
- (9) Jakob Grimm(1785-1863)ドイツの言語学者、文芸学者。古代ゲルマン学、ゲルマン言語学、ドイツ文献学の創始者。生涯、弟のヴィルヘルム (1786-1859) と共同で研究を行った。ドイツの法律学者フリードリヒ・カール・フォン・サヴィーニ (1779-1861) によって基礎付けられた歴史的観察法がグリムの学問的態度の基礎となっている。1812-15年『童話集』, 1816-18年『ドイツ伝説集』を出版。1819-37年には、『ドイツ文法』(ゲルマン語の文法)に取り組んだ。この研究においてグリムは、言語を有機的な成長のなかで位置づけようと試みた。その際、音声変化の規則性が発見される。母音交替(Ablaut)、変音(Umlaut) 子音推移(Lautverschiebung)などの発見によってグリムは、インド・ゲルマン語族の親縁関係についての研究を基礎付けた。
- (10) 子音推移は三つの主要規則にまとめられる。本論で例示したのはその最初のものである。第二の規則は、インドゲルマン語の有声帯気閉鎖音<Media Aspirata>は、ゲルマン語では有声閉鎖音となる、というもの。gr. *χορτος*, lat. hortus=Garten(庭) gr. *θυρα*, lat. fores=engl. door(戸) gr. *φερω* lat. fero= (ge-) bren (生む) 第三の規則は、有声閉鎖音は無声閉鎖音となるというもの。gr. *γεννα*, lat. gena = Kinn(頬) gr. *δύο* lat. duo=engl. two gr. *τυρβη*, lat. tueba = Dorf(村)以上は、オットー・ベハーゲル著『ドイツ語学概論』桜井・富山・早川・川口 訳 白水社 1972年 14-15頁 (Otto Behaghel: Die deutsche Sprache Max Niemeyer Verlag. 1958.) による。
- (11) Ferdinand de Saussure (1857-1913) スイスの言語学者。フランスのユグノー貴族の子孫である学者一家の長男としてジュネーブに生まれる。12才から13才の夏、『印欧語の起源』の著者アドルフ・ピクテ(1799-1875) と親しく交友し「言語学の真の素晴らしい喜び」を知る。14才で、処女論文「ギリシャ語・ラテン語およびドイツ語の諸単語を少数の語根に還元するための試論」を老師ピクテに捧げる。1875年ジュネーブ大学入学。1876年、創立されたばかりのパリ言語学会に入会。ライプツィヒに留学する。1877年、「インド=ヨーロッパ諸語のさまざまな a の弁別に関する試論」をパリ言語学会で発表。『インド=ヨーロッパ諸語における母音の原初体系についての覚書』をライプツィヒで出版。ライプツィヒで哲学博士号を取得。パリ言語学会事務局役員、高等研究員講師となる。1891年ジュネーブへ帰る。帰国に際しフランス政府より、レジョン・ドヌール勲章を贈られる。一般言語学講義は、1907年、1908年、1910年の三回行われた。講義を聞いた学生のノートをもとに、弟子のシャルル・バイイ、アルベール・セシエによって『一般言語学講義』が出版されたのは1916年である。現在知られているソシュールは、死後に出版されたこの『一般言語学講義』の著者としてと言っても過言ではない。現代言語学、また記号学の創始者。
- (12) ソシュール『言語学序説』山内貴美夫 訳 勁草書房 1971年 126-7頁。なお、1) から 4) の解説は、『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店 1994年 89頁による。
- (13) ソシュール『一般言語学講義』山内貴美夫 訳 而立書房 1976年 156頁 (Ferdinand de Saussure: Cours de linguistique générale Édition Critique préparé par Tullio de Mauro Editions Payot 1972. P.175.)
- (14) Louis Hjelmslev (1899-1965)
- (15) Th. Lewandowski: Linguistisches Wörterbuch Quelle & Meyer 1979. S.541
ウニタッシェンブーフの200, 201, 300として3巻で構成される、テオドール・レヴァンドウスキーの言

語学辞典では、2巻の paradigmatische Beziehungen の項目に以下の解説がある。「イエルムスレウは〈パラディグマ的〉という表現でソシュールの〈連合的〉という概念を置き換えた。」(542頁)そして、第4回国際言語学会議(1936)でのイエルムスレウの発表から次の部分を引用している。「F・ド・ソシュールの『一般言語学講義』における心理学主義を避けるため、私は〈連合関係〉という用語を〈パラディグマ的關係〉で置き換えた。」

- (16) 心理学を哲学、論理学、倫理学、美学などのあらゆる精神諸科学の基礎と考えるのみならず、芸術、宗教その他の文化全般を心理学的見地から捉えようとする立場。19世紀から20世紀への移行期にヨーロッパで隆盛を誇った。
- (17) ソシュール『一般言語学講義』152頁。
- (18) ある一定時期の言語の記述は共時言語学と呼ばれる。言語の時間のなかでの変化を記述するのが通時言語学である。しかし、「一定時期」をどのように理解するかは、必ずしも定まった見解はないようだ。私見としては、単なる時間的な規定というより、一つの主観の中で、あるいは複数の主観の間で共有される、といった理解が正しいと思える。
- (19) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店 1981年 36頁。引用文は1894年、メイエ宛てのソシュールの手紙である。
- (20) Otto Ludwig (1813-1865) 邦訳書には『天と地との間』黒川武敏 訳 岩波書店 1949年がある。ルードヴィヒの小説理論は、彼の死後1891年によく出版された。
- (21) Hrsg. Hartmut Schteinecke: Romanpoetik in Deutschland. Gunter Narr. 1984. S.31.
- (22) Käte Friedemann: Die Rolle des Erzählers in der Epik. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1965 (Unveränderter reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1910.) ケイト・フリーデマンの『叙事詩における語り手の役割』は、ベルリン大学で1910年、オスカー・ヴァルツェル教授に提出された博士論文。1965年にリプリント版が出版された。
- (23) ケイト・フリーデマンの同書「前書き」より。オスカー・ヴァルツェルの見解を祖述している箇所。
- (24) Edmund Husserl (1859-1938) オーストリア帝国のプロスニッツ(現在チェコのモラビア)に生まれる。ライプツィヒ、ベルリン、ウィーンの各大学に学ぶ。ウィーンではブレンターノに師事。現象学の創始者。1916年ゲッティンゲン大学、1916年からフライブルク大学に。本論で引用した手稿を書いた頃は、ゲッティンゲン大学助教授だった。
- (25) あらゆる先入見を排して事象そのものへかえり、純粋現象として事象をそれが経験において現れるままに受け取り、あるがままに分析・記述しようとする。現象学はフッサールにとって一切の学問的認識の基礎となるべきものだった。フッサールの唱えた現象学はその後、ハイデッガー、サルトル、メルロ・ポンティによりさらに展開されるとともに、言語学、心理学、精神病理学、文化人類学、芸術学、文芸学、神学、法律学と様々な学問分野に影響を与えた。
- (26) 『現象学辞典』木田・野家・村田・鷺田 編 弘文堂 1994年192頁。「自然的態度／超越論的態度」の項目より。
- (27) フッサールの1907年の手稿より。『現象学の理念』立松弘孝 訳 みすず書房 1965年 4-5頁。(Die Idee der Phaenomenologie Fünf Vorlesungen von Edmund Husserl. Herausgegeben und eingeleitet von Walter Biemel.)
- (28) Martin Heidegger (1889-1976) リュッケルト、のちフッサールに師事。1915年フライブルク大学講師。1923年からマールブルク大学教授。1928年からフライブルクに移り、フッサールのもとで哲学を講じる。1945-51年の間は、ナチ政権にたいする協力の容疑で講義を禁止された。フッサールの現象学を解釈学的・存在論的方向へ発展させた。主著として『存在と時間 上・下』桑木務 訳 岩波文庫 1960年がある。

- (29) Parmenides (544-501B.C.)ギリシャの哲学者。南イタリアのエレアの人。そこで彼の学派はエレア学派と呼ばれる。ゼノンとともにエレア学派を代表する。『自然について』と題される韻文の著作の断片が現存している。彼の哲学は存在と不在、存在と生成という二元論を特徴とする。ただ在るものだけが在り、また認識できる。思考と存在とは互いに一致し、また両者は同じものである。不在のものは存在せず、考えることもできない。生成も消滅もない。いずれも不在を前提とするからである。在るものは従って、生ぜず、滅せず、移ろわない。そしてそれはまた全きものとして球形である。
- (30) Platon (428/427-348/347B.C.)ギリシャの哲学者。ソクラテスの弟子。ユークリッドとピタゴラスの影響を受ける。作品は体系的な論文でなく、対話の形式を取っている。認識論、形而上学、そしてイデーについて語られるのは『シンポジオン』『パイドン』『ポリテイア2-10』『パイドロス』において。
- (31) Aristoteles (384-322B.C.)ギリシャの哲学者。プラトンのアカデミーに所属した後、アレクサンダー大王の教育者となる。その後アテネに戻り、自らの学校ペリパトスを創設する。カテゴリー論は、全集第1巻におさめられている。『アリストテレス全集 1 カテゴリー論 命題論 分析論前書 分析論後書』山本・井上・加藤 訳 岩波書店 1971年。
- (32) René Descartes (1596-1650) フランスの哲学者、数学者、自然科学者。「第一哲学」はアリストテレス以来の用語で形而上学を意味する。アリストテレスによれば第一哲学とは、それぞれの特殊な学問が一定の特殊な領域に限定されているのに対し、限定なしに存在を端的に存在として問うところの学、と言われる。デカルトにとっては、人間の認識の確実な拠り所を見出すことが問題であった。そして、不可疑的なものを、方法的懐疑によって獲得された「私は考える、従って私は在る」という洞察に求めた。つまり、思考のなかでの確実性にある。
- (33) Immanuel Kant (1724-1804)ドイツの哲学者。カントは『純粋理性批判 上』(篠田英雄 訳 岩波文庫 1961年)のなかで次のように述べている。「私は、対象に関する認識ではなくてむしろ我々が一般に対象を認識する仕方—それがア・プリオリに可能である限り、—に関する一切の認識を先験的(transzendent)と名づける。するとかかる概念の体系は、先験的哲学(Transzendental-Philosophie)と名づけられてよい。」(79頁)
- (34) 木田元『現象学』岩波新書 78—79頁。(Husserliana Band IX. S. 517)
- (35) Friedrich BeiBner (1905-1977)ドイツの文献学者。1945年からテュービンゲン大学で教鞭をとる。ヘルダーリンのシュトゥットガルト版を編纂。シラー全集の編纂に参加。カフカについては、「物語作者フランツ・カフカ」(1952)「詩人カフカ」(1957)「バベルの竪穴 カフカの日記より」(1962)「カフカの〈夢のような内面生活〉の表現」(1968)の四つの講演がある。また、バイスナーに学んだ、M. ヴァルザー、J. コープスのカフカ論も、カフカ研究に興味深い観点を導入している。(F. バイスナー『物語作者フランツ・カフカ』粉川哲夫訳 せりか書房 1976年。「詩人カフカ」加藤忠男 訳 『カフカ論集』城山・川村 編 に集録。〈F. BeiBner: Der Erzähler Franz Kafka. Und andere Vorträge. Suhrkamp 1983.〉M. ヴァルザー『カフカ ある形式の記述』城山・田ノ岡・加藤 訳 サンリオ出版 1973年。〈M. Walser: Beschreibung einer Form. Carl Hanser Verlag. 1978.〉)
- (36) Franz Kafka (1883-1924)現在チェコのプラハに生まれる(当時はオーストリア・ハンガリー帝国)。ドイツ系の学校に学び、ドイツ語で創作した。生前は限られた範囲でしか知られていなかったが、第二次大戦後フランスで、カミュやサルトルに評価され世界的に知られるようになった。小説『変身』が有名。『カフカ全集』全12巻が新潮社から出版されている。
- (37) F. バイスナー「物語作者フランツ・カフカ」51—52頁。(F. BeiBner: Der Erzähler Franz Kafka. S. 37.)本論で用いたドガ、ピカソの絵画は、以下の画集からのものである。
ドガ：『原色世界の美術』18巻 小学館

ピカソ：『美術の歴史』H. W. ジャンソン 著 木村・辻 訳 創元社 1980年

Summary

Zu einer Denkform der Moderne Einleitung

Hiroaki NOGUCHI

Zu Beginn des 20. Jahrhunderts erscheint nicht nur in der Kunst und Literatur, sondern auch in der Sprachwissenschaft und in der Philosophie eine neue Tendenz, für die das Interesse am Bewusstsein charakteristisch ist. In dieser Einleitung zeige ich nur kurz, dass im Gemälde von Degas und Picasso, in der Sprachwissenschaft von de Saussure, in der deutschen Romantheorie, in der Phänomenologie von Husserl und auch im Roman von Kafka der Wandel des Interesses von der äußeren Welt hin zur inneren beobachtet wird. Heidegger nennt das "die Umwendung des Blicks vom Seienden auf das Bewusstsein". Damit entsteht ein neuer Bereich des Wissens und wir besitzen ein neues Wissen. Aber was für ein Wissen? In den Aufsätzen, die auf diese Einleitung folgen, gehe ich auf diese Frage ein.